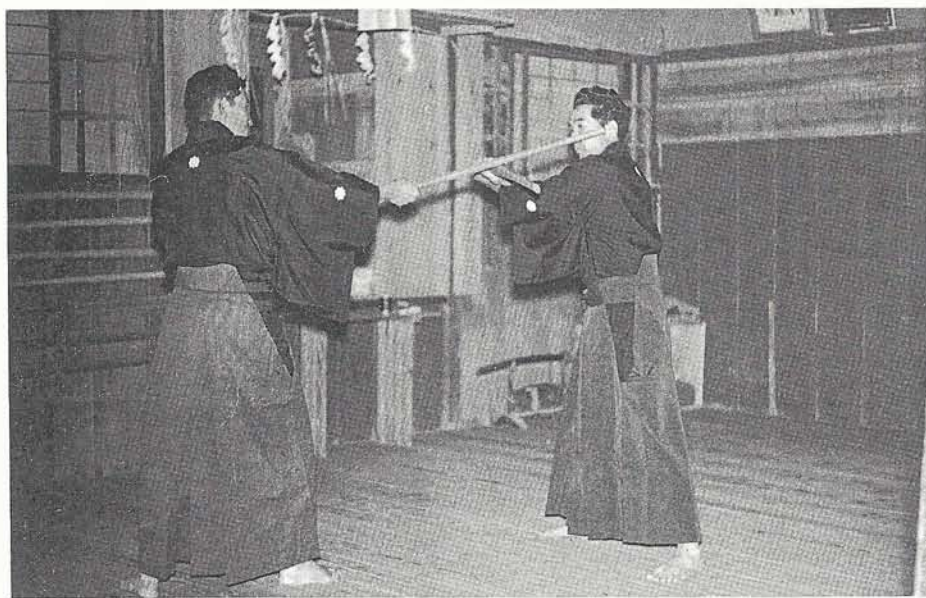


# 劍聖・飯篠長威齊家直公

大竹 利典

日本武道の源流「天真正伝香取神道流」は飯篠伊賀守家直公を流祖とする武道であります。家直公は元中四年（一三八七）に下総の国飯笹村（今の香取郡多古町）の郷士の家に生まれ、刀槍の術にすぐれ、主家の千葉家においても武勇の誉れ高くその名は四隣にとどろいていました。

ところが、争いが起こり千葉家は離散。そのころ、香取神宮下の御神井にて従者が馬を洗ったところ、馬が苦しみ、たちまちにして死んでしまいました。家直公は、経津主大神の御神威に触れ悟るものがあり、一族郎党の者を解雇し、香取神宮へ一千石、大槻宮本村に新福寺を建立し寺館として一千石を収め、香取神宮奥の宮に程近い梅木山に隠棲し、香取の神に一千日の大願を立て、齋戒沐浴兵法に励み百煉千鍛を重ね、毎夜丑の刻には神前にて祝詞を奉読し、天下泰平を祈念し、寅の刻に毘沙門殿にて毘沙門経を読み、粉骨の修業をしました。そして、香取大神より梅の古木の上にて「汝後に天下劍客の師とならん」との神示と共に兵法神書一卷を授けられたと伝えられております。経津主大神の真伝であるところから「天真正伝」を冠し、「香取神道流」と称するのであります。飯篠家は「代々長男は諸国の大名よりいかなる高禄を以てしても仕えず」という家訓があり、現在二十代目の宗家飯篠快貞先生。門流には新陰流の上泉伊勢守信綱、鹿島の塚原土佐守およびト伝、松本備前守政信、諸岡一羽斎等を始め秀吉の軍師として有名な竹仲半兵衛重治、奥州仙台公家



太刀術。七條太刀のうち、首打ち。大竹利典師範(右)と小山田文雄氏(左)。昭和62<1987>年

老で、白石城主片倉小十郎村典、幕府旗本には中台信太郎、また諸藩の代々指南家等枚挙にいとまがありません。

なお当流には劍術、居合術、棒、槍、薙刀、柔、手裏劍、忍術、築城法から天文地理風水陰陽気学に至る総合された軍学兵法があり、日本武道の長上に位しております。「不動智神妙劍ツバメ返し」等の極秘剣もあり、今でも入門の際に血判を押す厳しさです。約六百年の永きにわたって伝えられてきた神道流兵法は、昭和三十五年（一九六〇）、日本武道では最初の無形文化財に指定されました。

家直公は長享二年（一四八八）四月十五日、一〇二歳の高齡で歿。  
法号「泰巖院殿平朝臣伊賀守来翁道本大居士」  
家直公は長享元年四月、故郷飯笹村に帰り、同年八月如意山地福寺を創建しております。  
日本の軍学兵法の奥義極地は「表裏陰陽有無一如」であり仏教の教へと一体となっています。そして修業の結果、活人円剣を悟り人の道を全うする。

家直公は「敵に勝つ者を上とし敵を討つ者は之に次ぐ」と教えています。現代にも適合する流祖の遺された教え「平法」は永遠の道であり偉大な教えであるとしか例えようありません。

私は昭和十七年（一九四二）秋、十六歳の時、神道流師範・林弥左衛門先生に入門しました。それから半世紀余りの年月がたちましたが、近頃の世相は新しさを追いつぐために、古い良いものを加速度にしかも無自覚に失いつつあります。我々は精神的には古くとも、良いものは毎日の生活に意義づけていきたいものです。

日本の武術は古い時代から武家文化として歴史と共に歩んできました。磨きぬかれた貴重な日本民族の伝統である武家文化の保存に、微力ではありますが、私の生涯をかけたかと思っております。

飯篠長威齊家直公生誕六百年記念

六百年の感慨をうたに託して

（昭和六十二年五月）

六百の春をめぐるて

たゆまなし

香取の森にかほる太刀風

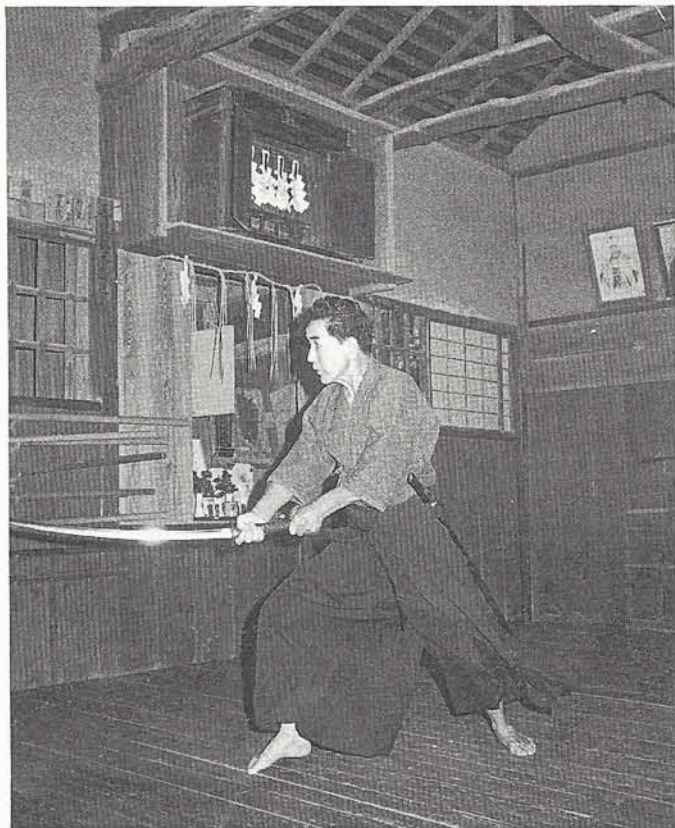
（天真正伝香取神道流師範）



神武館道場にて小太刀の稽古。右はドン・ドレーガー氏(アメリカ)。昭和49<1974>年。ドン・ドレーガー氏は、ハーバード大学卒。昭和22<1947>年、アメリカ海軍少佐として日本に上陸。武道を好み講道館柔道5段、剣道7段、居合道7段、杖道7段、教士の猛者。昭和41年4月神道流に入門、17年間修業、免許皆伝の後、昭和57年10月ガンのため他界



方位学を見る大竹師範(昭和62<1987>年)



居合術。香取宗家道場にて(昭和52<1977>年)